TO KILL A MOCKINGBIRD

by HARPER LEE

アラバマ物語

菊池重三郎訳

*

暮しの手帖の本

アラバマ物語　定価一〇〇〇円
昭和五十九年三月五日発行　第二十三刷
著者　ハーパー・リー　訳者　菊池重三郎
発行者　大橋鎭子
発行所　暮しの手帖社　東京都港区六本木三ノ一ノ一（興和ビル）
印刷所　青山印刷株式会社
●落丁乱丁などありましたらいつでもお取りかえいたします

れた黒人の若者をタテ糸に
見事に織りなした人生のメロドラマ
61年度のピュリッツァ賞にかがやき
十一カ国語に飜訳され、すでに数百
万部を売りつくし
九十五週延々二年にわたって連続ベ
ストセラーをつづけた名作である

アラバマ物語

ハーパー・リー著

菊池重三郎訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

TO KILL A MOCKINGBIRD

by HARPER LEE

Copyright © 1960 in U.S.A.

by Harper Lee.

This book is published in Japan

by Kurashi no Techo Sha Co., Ltd.,

by arrangement with Franz J. Horch Associates

through Charles E. Tuttle Co., Tokyo.

法律家だって、こどもだった時があったろうに

——チャールス・ラム

著者のハーパー・リーさんは、一九二六年、米国アラバマ州のモンローヴィルに生れた、今年はたしか三十八才である。これまで彼女はニューヨークの航空会社で働いていたが、最近は故郷にかえって、つぎの作品にとりかかっている。この物語に出てくるメイコームという町は、もちろん架空の町だが、モデルは彼女の故郷モンローヴィルである。

■写真は映画アラバマ物語から
日本ユニヴァーサル映画提供

第一章

兄のジェムは、十三になろうという年に、ひじをかなりひどく骨折したことがある。一時は、これでもうフットボールもできないのかと、ひどく悲観していたが、なおって、その心配もなくなってしまうと、それからは、大してひじを気にしなくなった。

しかし、それ以来、ジェムの左手は、わずかだが、右手より短くなった。立っているとき、歩いているとき、気をつけてみると、左手の甲が内側にねじれて親指がいつも腰にふれていた。しかし、当のご本人は、フットボールでパスやパントができさえすれば、少しくらい腕がねじれてなおろうが、いっこうにかまわなかったらしい。

それから何年かたち、私たちも昔のおもいでばなしなどする年になると、しぜん、ジェムが腕を折ったあの事件も、ちょいちょい二人の話題になっていた。

あの事件は、みんなユーイル一家のことから起こったのだと、私はおもうのだが、四つ年上のジェムにいわせると、それよりずっと前、つまり、ディルがやってきて、ブー・ラッドリーを外へつれ出そうじゃないかといいだした、あの夏からはじまるというのだ。

そんなに持ってまわって考えるのなら、もとはといえば、第七代大統領のアンドルー・ジャックソンじゃないの、と私はいってやった。だって、ジャックソン将軍が、南部に住んでいたクリーク・インディアンを追って、アラバマ河をさかのぼって来なかったなら、私たちの先祖のサイモン・フィンチも、わざわざアラバマ河を舟をこいでやってくることもなかっただろう。先祖がここにやって来なければ、私たちだって、どこに住んでいたかわかったものじゃない、そういってやったのである。

昔なら、ここですぐ、とっくみあいのケンカになるところだが、さすがに、お互い大きくなっていたから、ここはひとつ、父のアティカスにきいてみることにした。

ところが父は、二人ともまちがっていないといった。

南部人としては、わがフィンチ家は、その昔、ヘイスティングの戦いに参加したというほど古くないので、家柄をほこる連中のまえでは、いささか肩身がせまいのである。わかっている先祖というのは、イギリスのコーンウォールから移住してきて、毛皮や薬を売り歩いていたサイモン・フィンチである。彼は信仰心があついというより、商売気がつよい男だったらしい。

そのころ、イギリスでは、メソジスト教が、あんまり厳格なので、一般に受け入れられず、苦しい立場にいた。サイモンも自分ではメソジスト教徒のつもりだったので、これにいや気がさして、はるばる大西洋をわたって、フィラデルフィアにやってきた。それからジャマイカへゆき、さらにアラバマへきて、モービールから、セント・ステファンまでさかのぼってきたのだった。

メソジスト教の創始者ジョン・ウェズレイは、舌先三寸で商売することをいましめたが、サイモンはそれを気にしながらも、薬を売って、一財産つくった。しかし、こうやって金はたまってきたが、サイモンはすこしも幸福ではなかった。美服をまとい、ぜいたくな暮しをするといった、神の御心にそわないほうに、ずるずると傾いてゆきそうな不安が、いつもつきまとっていた。

そこで、人間の売買をいましめた師の言葉も忘れて、奴隷を三人買い、この奴隷の手をかりて、セント・ステファンから四〇マイルほどさかのぼった、アラバマ河のほとりに、農場をきりひらいたのである。

その後サイモンは、もう一度、セント・ステファンへもどり、そこで妻をみつけている。ここではじめてフィンチ家がきずかれ、その娘たちにひきつがれていったことになる。サイモンはかなりの年まで生き、相当の財産をのこして死んだ。

それ以後、フィンチ家の男たちは、代々〈フィンチの荷上げ場〉とよばれるこのサイモンの農場で、棉をつくってきた。ここでは、ほとんどが自給自足だった。この〈荷上げ場〉は、まわりの農場にくらべて、かくべつよい土地というわけではなかったが、氷や小麦粉や衣類を、モービールから河蒸気で運んでくるほかは、なんでもここでつくられていた。

南北戦争では、サイモンもあの世でどんなにもどかしがって腹を立てたことだろう。この戦争は、彼の子孫から、なにもかもうばい去ってしまい、かろうじて土地だけが残されたのである。それでも、フィンチ家の連中は、なおこの土地をまもり、先祖の暮し方をつづけていた。この暮し方が変ったのは、二十世紀にはいってからで、父のアティカス・フィンチが法律の勉強にモンゴメリーへゆき、叔父のジョン・フィンチが医学をやりにボストンへゆくようになってからである。〈荷上げ場〉に残ったのは、姉のアレクサンドラおばさんだけで、おばさんは、ここで結婚した。夫という人は、一日のほとんどを、川ばたのハンモックにねころんで、つり糸がひくのをながめているような、不愛想な男だった。

アティカスは、資格をとると、メイコームへもどって、弁護士をはじめた。メイコームの町は、〈フィンチの荷上げ場〉から二〇マイルほど東にあって、メイコーム郡の郡役所がおかれていた。アティカスの事務所は、その郡役所の中にあったが、部屋にあるものといえば、帽子かけとたんつぼとチェッカー盤と、それにまだ手あかのついてないアラバマ法典といった程度だった。

アティカスの最初の依頼人は、二人とも、アラバマ州の最後の絞首刑囚だった。アティカスはこの二人に、いさぎよく罪を認めて、そのかわり、第二級殺人として、死刑だけはまぬかれるようにすすめた。ところが、この二人は、メイコーム郡でもわけしらずな一家として知られているヘイヴァーフォード家のものだった。町でも屈指のカジヤを、馬をどこにとめたか、というささいなことから殺してしまったのである。それも、三人も目撃者のみている前で、やってのけながら、あんな大バカ野郎は、殺されてあたりまえだ、としゃあしゃあとしていた。彼らは、第一級殺人として、あくまで無罪を主張したから、アティカスとしては、もう手の下しようがなく、だまって、このふたりの刑の執行に立ち合うより仕方がなかった。

アティカスが、刑事事件をひどくいやがるようになったのは、このときからしい。メイコームで開業した最初の五年間というものは、経済的にひどく、くるしかったらしい。というのは何年間か、弟に学資を出してやっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ていたからである。ジョン・ヘイル・フィンチは、父より十も年下で、棉の景気がわるくなってきたとき、医学をやることにしたのである。

そのジョンおじさんが学校をでて一人前になると、アティカスの暮しにも、かなりゆとりができた。アティカスは、メイコームが好きだった。この郡で生れ、ここで大きくなった。ここの人々ならよく知っているし、むこうもアティカスをよく知っていた。それに、先祖のサイモン・フィンチのおかげで、アティカスは、町のたいていの家と、なにかしら血のつながりができていた。

メイコームは古い町だった。私がものごころついたときから、もう疲れてしまったような古い町だった。雨がふると、道路は赤土のぬかるみにかわり、歩道には草がはえ、広場にある裁判所の建物はゆがんでいた。どういうわけだか、そのころの夏のほうがいまより暑かった。黒犬が暑気にあえいでいた。荷車をひいたやせたらばが、広場の大きなかしわの、うだるような木かげで、蠅をはらいのけていた。男たちのかたいカラーは、朝九時までには、くたびれてしまった。婦人たちはお昼まえと三時の昼寝のあとにお風呂に入った。だから日暮れともなれば、まるで、汗とにおいのよいタルカム・パウダーで、砂糖衣をつけたお菓子のようだった。

そのころは、人々の動きものんびりしていた。広場を横切るのだってせかせかするではなし、あたりの店にしても、ゆっくり出たり入ったり、なにをするにも時間をたっぷりかけた。一日は二十四時間しかないのに、それがもっとながいような気がした。行くところもなく、買うものもなく、あってもお金がない、さればといって、メイコーム郡から外にでて見たいものがあるわけでもないから、いらいらすることもなかった。おもえば、なんとはなしに気らくな時期で、メイコーム郡には、心配ごとがなにもない、それが心配といえば心配だ、というくらいのんびりとしていた。

私たちは、この町のおもだった屋敷町に住んでいた。家族は父のアティカスと兄のジェムと私。それにコックのカルパーニアである。ジェムと私は、父を申し分のない人だとおもっていた。いっしょに遊んでくれたし、本

も読んでくれたし、しかも礼儀正しくて、きちんとした態度で私たち兄妹を扱ってくれたからだ。

ところが、カルパーニアはそうはいかなかった。根っからのこちこちで、律義者なのである。近眼で、やぶにらみで、てのひらはベッドの板のようにひろく、その倍もかたかった。いつも、私に、台所から出ていけと叱りつけ、ジェムのほうが年上なことを承知していながら、あんたはどうして兄さんのジェムを見習って、行儀よくできないかといい、そればかりか、外でもうすこしあそんでいたいとおもうときにかぎって、うちへ呼びもどすのだった。

私たちの口喧嘩は、雄壮かつ一方的だった。アティカスがいつもカルパーニアを立てることにしていたので、凱歌はきまってカルパーニアにあがった。彼女は、ジェムが生れたときから、ずっと私のうちにいた。だから、思い出せるかぎり、私は、その専制的存在になやまされてきたわけである。

母は、私が二つのときになくなった。私には、母のいないことが、べつに気にならなかった。母はモンゴメリー市のグレアム家の出であった。アティカスが彼女にあったのは、はじめて州議会議員に当選したときのことで、当時、アティカスはもう中年で、母のほうは十五も年下だった。ジェムは父母の結婚第一年目に生れ、四年たってから私が生れた。それから二年後に、母は心臓まひでなくなった。母方には心臓病の血統があったらしい。私は母がいなくなったって、どういうこともなかったが、ジェムははっきりと母のことをおぼえていたから、さびしかったろうとおもう。あそびの途中で、ときどき、ため息をついて仲間からぬけていき、車庫のうしろで、しょんぼりあそんでいることがよくあった。そんなとき、私はそっとしておくのが一番いいと考えたものだ。

私がほぼ六才、ジェムがやがて十才になろうという頃、私たちが外であそぶことを許された夏の境界（カルパーニアが呼べばきこえる範囲）は、家から北に行って二軒目のヘンリー・ラファイエット・デュボーズ奥さんの家まで、南は三軒目のラッドリー荘までであった。私たちはその境界線を破ろうなどとは、けっしておもわな

かった。ラッドリー荘には、正体のわからない人間が住んでいて、話がそれにふれると、私たちも当分はおとなしくなった。デュボーズのほうは、奥さんといえばきこえはいいが、つまりは鬼婆だった。

あれは、ディルが私たちのところへやってきた夏のことだった。

ある朝早く、私たちが裏庭で、れいによってあそびをはじめようとしていると、となりのレイチェル・ハヴァフォードさんの野菜畑で、物音がするのをきいた。私たちは、小犬でもいるのじゃないかな、レイチェルさんでは、近くラット・テリヤ（鼠を殺すように仕込んである）にこどもが生れることになっていたから……とおもったので、金網の垣根のところにいった。ところが、案に相違して、こちらをみて坐っている子がいる。その子は腰をおろしていたので、野菜畑とおつかつの背丈だった。私たちはその子が口をきくまで、じっと相手の顔をみつめていた。

「…ちわぁ」

「ちわぁ……」ジェムと私は気持よく返事した。

「ぼく、チャールズ・ベイカー・ハリスっていうんだ。字が読めるよ」

「それがどうしたの」私が口を出した。

「どうもしない、ただ、ぼくが字が読めるってこと知りたいだろうと思ったからさ。どうしても読まなきゃならんものがあったら、ぼく読んであげても……」

「君、いくつ」ジェムがたずねた。「四つ半？」

「もうすぐ七つ」

「ならびっくりすることないや」ジェムはこんどは私にむかって親指をぴくぴくさせながら、「このスカウトはね、生れたときからずっと字が読めるんだ。まだ学校にもあがってないのにさ。君、もうすぐ七つだって？それにしちゃ、ちっちゃいじゃない」

「体はちっちゃいさ、だけど、年は小さかないよ」

ジェムは、いっぱし、年長者らしく髪をかきあげ、

「どうして、こっちへやってこないのさ、チャールズ・ベイカー・ハリス、……なんて、へんてこな名だ」

「君の名ほどじゃないさ。レイチェル叔母さんがいったよ、君の名は、ジェレミイ・アティカス・フィンチだ

って」
ジェムは顔をしかめた。「ぼくは大きいから、それでいいんだい。だけど、君の名は、君にしては長すぎるよ。たしかに一フィートは長いね」
「みんなぼくのことディルと呼ぶよ」ディルは垣根をくぐってこようと、やっきになりながら、いった。
「そんなとこくぐらないで、乗りこえてきたらいいじゃないの」と私は注意した。「あなた、どこからきたの」
ディルは、となりのミシシッピイ州のマリディアン市からやってきて、レイチェル叔母さんとこで夏をすごしていた。これからも、夏になったら毎年、メイコームにくるつもりだった。彼の家はもとはメイコーム郡の出だったが、現在、母親はマリディアンで写真屋をやっている。いつか〈美しい子供〉を主題にしたコンテストにディルの写真を出して、賞金を五ドルもらったことがある。そのとき、母親はそれをそっくりディルにくれたので、二十回も映画にいったんだそうだ。
「ここではね、郡役所でときどきキリストものをみせてくれるだけさ」とジェムがいった。「君、なにかいいのみた？」
ディルは〈ドラキュラ〉をみていた。これにはさすがのジェムもおどろき、ディルに一目おいたらしい。「それぼくたちに話してくれない」とジェムがいった。
ディルはなんだかおかしな子だった。青い麻の半ズボンをはいていて、それがシャツにボタンどめになっていた。髪の毛は雪のように白く、あひるのうぶ毛みたいに頭にひっついていた。ディルは私より一つ年上だが、私のほうがぐんと背が高かった。その映画を話してくれるとき、青い目はかがやいたり、かげったり、そして思いだしたように声をあげては笑いだして、いかにもたのしそうだったが、そういうあいだにも、額のまんなかにたれた髪の毛を、しょっちゅう引っぱるくせがあった。
ディルが〈ドラキュラ〉の死んだところで話を結ぶと、ジェムが、本なんかより映画のほうが、よっぽど面白そうだなといった。こんどは私が、お父さんのことを持ちだした。
「どこにいるの、なんにも話してくれないのね」
「お父さんなんか、いないよ」

「死んだの……」
「ううん……」
「死んでなきゃ、いるんじゃない？」
ディルは顔をあからめた。ジェムは、「しっ」と、私をたしなめた。これはディルを好きになって、思いやりをかけている証拠にきまっている。
その日から毎日、私たちはおなじことをくりかえして、夏がすぎていった。おなじことをくりかえして、なにがそんなにたのしかったかというと、裏庭に茂っている大きなふたごのむくろじの木の枝につくりつけてある小屋を改造してみたり、つまらないことに大さわぎしたり、いろんなお話から勝手にでっちあげた劇を、やってみたりしたからである。お芝居をやるのに、ディルがいたのはねがってもないことだった。ディルは、私がこれまで押しつけられていた役、たとえば〈ターザン〉にでてくる猿のような役をやってくれた。だから私たちは、いつかディルのことを、アーサー王物語に出てくる徳の高い魔法使いマーリンのポケット版とおもうようになったが、それにしても、この小型マーリンの頭には、どのくらいとっぴな計画や、風変りなあこがれや、奇妙な空想がつまっていたかわからない。
けれども、八月も終りごろになると、私たちの芝居も、お手本あってのまねごとだったので、どれをやってもつまらなくなってしまった。そのときだった。ディルはブー・ラッドリーを外にさそいだそうという思いつきを打明けたのである。
彼は、ラッドリー荘のことで、夢中になってしまっていた。そのことでは、私たちはどれくらい警告したり、説明したりしてやったかわからないのに、月が潮を引くように、ディルはその家にひきつけられた。もっとも、ラッドリー家の門から、いちおう、安全距離にある角の電柱のところまで行くだけで、その先にはいかなかった。そしていつも太い電柱に腕をまわし、あやしむようにじっと目をすえて、そこにたたずんだものである。
ラッドリー荘は私たちの家の向うの、急なまがり角に張りだしていた。南へ歩いてゆくと、目の前にヴェランダがみえ、その敷地のそばを歩道がまがっていた。家は低く、ひところは、奥行の深い正面玄関と緑色のよろい

戸のある白い家だったらしいが、いまでは、家をとりまく灰色の庭にまけないくらい陰気な色になっている。雨でくさった屋根板がヴェランダのひさしにたれさがり、暗くかしわの木が陽をさえぎっている。きびや野生タバコが雑然と生いしげった庭は、荒れほうだいで、形ばかりのこった柵が、それをぶざまにかこっている。

その家には、悪いことをする幽霊がいるというわさだったが、ジェムも私も、みたことは一度もなかった。なんでも、夜、月が沈むと、外にでてきて窓からのぞくという。寒さが急にきて、どこの家のつつじもちぢみあがる、すると、幽霊屋敷の主が息を吐きかけたからだという。犯人不明のいたずらがおこる。すると、なんでもそいつのしわざにされるというわけだ。以前、町の人々は、夜中におこる気味の悪い一連の出来ごとに恐れをなしたことがある。それは、飼っているにわとりや動物がつぎつぎにむざんな殺されかたをしたもので、犯人は、じつは〈バーカーの淵〉に身投げした気ちがいのアディーだったのに、人々はそれでも、最初にいだいた疑念を捨てようとはしないで、ラッドリー荘を怪しいとにらんだものだ。ニグロでさえ、夜間はラッドリー荘をよけて、反対側の歩道へ横切って行き、口笛を吹いて歩いていた。メイコーム学校のグラウンドは、ラッドリー荘の敷地のすぐ裏手になっていて、そこにラッドリー家の養鶏場の高いピーカン（アメリカくるみの一種）の木から実がこぼれ落ちたが、こどもたちは手もつけなかった。そのピーカンを食べると、死んでしまうことになっていた。また、野球でボールをその庭に打ちこんだら、万事休すで、こどもたちは、それについて口をきこうともしなかった。

このラッドリー家の不幸は、ジェムと私が生れる何年もまえにはじまっていた。この家の人たちは、ほんとうは町中どこでもよろこんで迎えられたのに、ひとと交際しなかった。こんな一方的なことはメイコームでは例がなかった。彼らはメイコームでただ一つ気晴しのできる教会にもいかないで、家で礼拝をした。ラッドリー奥さんは、ときに、午前のお茶を近所の人といっしょにしようと表通りを横切ることはあっても、伝道仲間には決して加わろうとしなかった。主人のラッドリー老人は、午

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb